

DU WATCH

劣化ウラン研究会ニュースレター 第6号(2002/3)

内 容

1. イラクと劣化ウラン被害の子供たち
2. 核のゴミ切り捨て法案と劣化ウランの危険な関係
3. 軍事基地は戦争のためのものそして米軍基地のある所では、劣化ウラン弾が使われている
4. ニュースクリップ
5. 資料紹介 & ご案内

[寄稿]

イラクと劣化ウラン被害の子供たち

ジャミーラ・高橋 (アラブ文化協会代表)

世紀最大のショウ「9・11のニューヨークTB爆破」は、世界中の人々の心理を放心状態にしてしまった。そしてあれよあれよという間に、アメリカのアフガン爆撃が始まった。私はあのビル爆破の時間帯は、ガザからエルサレムに移動中だった。タクシーのドライバーが流していた音楽が、急にけたたましく「ウサマ・ビン・ラーディン、ウサマ・ビン・ラーディン」と名前を特定する放送にかわったのは、現地時間で丁度4時だった。何事か！と思ったが、ヘブライ語なので詳細は解せなかった。私がビル爆破を知ったのは、それから数時間後、岩のドームで礼拝を済ませてホテルに帰った時、みんながBBC放送に嘔りついていて、事の次第がわかった。しかし爆破はイスラエルの現地時間では3時のはずだ。4時の犯人特定は、<余りにも早いのではないかと>ずっと心に引っかかっている。

私が訪ねた時期は、西岸パレスチナ自治区はイスラエルによって幾重にも規制が敷かれ、分断され、軍は戦車を繰り出していた。そして、「この時を、待っていた！」とばかりに、ビル爆破テロ=パレスチナ人テロの構図を作り、翌日はジェニンを、翌々日はジェリコの市街を攻撃して、多くの死者と負傷者を出した。因みに国境を塞がれた私は、2日間牢獄にいる思いで、つぶさに見聞していた。

湾岸戦争が過去になったように霞み、次の戦争を用意する米政府やユダヤの解けないカラクリに答えが出ないまま、イラクから「経済制裁を解いてくれ！10月会議をするから来てくれ！」の呼びかけのEメールにも返事さえ出さず、ただじっとしていられずに、私は緊急を要する「凍死のアフガニスタン人を救え！」を必死に呼びかけた。それに答えてくれた人は、御蔭さまで全国的な広がりとなり、衣類を満載したコンテナは40フィート(12m)を45台も出すことができた。

この衣類をアフガン難民キャンプに届けなければならなく、また1月17日は、昨年一昨年モラムゼー・クラーク(元米司法長官)率いるアメリカの国際的グループとイラク訪問をしていたので、今回ニューヨークからの呼びかけは無かったけれど、私は一人でも行かなければならぬ事を考えていた。

そこで、1月14日にバイルート経由でダマスカス、翌日はシリア航空機でバグダードに飛んだ。私の今



白血病担当の腕の良い医師とジャミーラさん(バグダード、国立サダム小児病院)

回のイラク訪問の、本当の目的は、劣化ウランでダメージを受けている特に子供の白血病やガンの患者を、試験的に日本に呼んで治療を受けさせたいので、その調査と準備のためだった。

ヨードを被爆防護のために飲ませるとい話は聞かれたことがあると思うが、それは無機のもので、実害があるため多量に飲むことは出来ない。それを有機化すると多量に摂取可能で、しかも体内のウランをヨードにくっ付けて排出してくれる。これの原料は沃素で、日本近海から取れるものが特に優れているのだという。この有機ヨードで治療するため、劣化ウラン被害のイラクの患者を日本に呼びたいという計画なのである。

子供たちの白血病が ガンと合体して新症状で広がっている

今回はバグダード2つとバスラ2つの、下記の病院を訪問した。

サダーム小児病院

白血病に罹った子供たちは、全国からバグダードのここに集められて治療を受けている。この病院を私は過去何度となく訪ねているので勝手に分かってた。発病初期でも抗がん剤を充分投与出来なくて、



ベッドが不足しているため、二人で使用（バグダード、国立サダーム小児病院）

急変して死に至る。勿論青白くて特別欠陥のなさそうな子供も多いのだが、この度は違う姿の子供が多く目についた。へばりつくように赤アザが皮膚を被っている赤ちゃん。腹にしこりが出来て、膀胱をふさぐのか管をつけた幼児。追って来て写真を撮るとせがんだ少女は胸いっぱい板のようにガンが出来ていた。ベッドが足りないのだといって2人の幼児が同じベッドに寝かされていた。羅病の子供数が益々増えていることと、血液がガン化するだけで

治る子供もみすみす取り返しのつかない重症患者にしてしまったという話をしばしば聞いてきた。白血病患者の特徴は、青白くても一見元気そう、だが治療を怠ると容態が

は済まなく、いろいろな個所の細胞がガンとなつてしつこく体を蝕んでいるのだ。

救急病棟もまたすごく、医師と看護婦数人が必死で、酸素吸入をしたり点滴をしたりと応急処置をしていた。案内してくれた平和友好連帯のMr. カーリムが話し掛けた相手は彼の隣家の人だった。「あの息子がガンなんだよ。今朝家から出て行ったんだ」と彼はぼそりと説明してくれた。

マンスール医療センター病院

国立の難病医療の研究センターである。この白血病子供病棟には、失明してしかも左眼からは目の構造そのものがべろっと外に流れ出している少年。内臓がパンパンに膨らんで紫色に透けて血液が見えるいる幼児。睾丸の脇に血液がいっぱい溜まってしこりになってしまった少年。これらの病気も白血病だというのが、体内を駆け巡る血流が思わぬところの細胞をガン化し、それが成長期であるがゆえにとてつもない大きさに成長してしまったのだ。これもウラン独特の悪さだというのだ。

今回はボラロイドカメラを持参した。記念に撮ってあげると、具合が悪くても大抵の子供は一時とても嬉しそうなる表情をするし、親も望む。ところが、どうしても厭だと言って撮らせない子がいた。親も手におえないほど、容態が悪いのだ。

バスラ産科小児科病院

昨年アメリカのグループと一緒に訪ね、無残な新生児の写真の展示にいたたまれなかったが、今回院長はさらに克明な自分用の写真ブックを広げて見せてくれた。新タイプの奇形児は、頭がついていないで生まれている。白血病にも6~7タイプあって、最近ガンに移行するケースが多いのだという。ウランのダメージは、年を追うごと、日を追うごとにひどくなる。しかし経済制裁下ではこれに対処する医学を研究する余裕がないと、一番の悩みを訴えていた。

医師の現場でしか撮れない新生児奇形を並べた写真帖をお借りして、デジカメラに収めてきた。



出産時に医師が撮った欠損症児らの写真（バスラ、バスラ産科小児科病院）

人の生命を宿しそうな肉の塊。それでも生きて生まれて来たのだ。何と罪深いことか。

サッダーム教育病院

ここは新しい症例に対処する医師を教育する病院である。対応してくれたジョワード・アルアリ医師は、カタール衛星テレビのアル・ジャジーラ制作の



国立サダム教育病院のジョワード・アルアリ医師(左)とガン治療の同僚医師、バスラ空港支配人

「Uranium Storm (日本語タイトル:劣化ウラン弾の嵐)」に登場する医師で、初対面ながら以前から知り合いだったような錯覚で話し込んだ。彼はロンドンとグラスゴーで医学を研鑽したというだけあって、流暢な英語で明快な話し方をした。この病院勤務は20年のベテラン。1980年勃発のイラン・イラク戦争中も砲弾が降ってきて、91年の湾岸戦争の時は最前線の激戦地に隣接のため、病院が劣化ウラン弾の爆撃を受けたのだという。ウラン微粒子が充満しているため、同僚のガン治療医師5人のうち、3人が既にガンで亡くなってしまったという。今まで症例の無い多種類のガンが多発するので、それに対応(それを研究)するならば医師が100人いても間に合わないのだと笑って話す。国連の経済制裁下では薬も無ければ治療方法の情報も入らず、苦しむ患者と向き合って、ただひたすら肥大するガン細胞と格闘して、えぐり取るのが彼の仕事。

病室を案内して患者に声を掛けながら、「彼は、今朝3回目の手術をしたけれど、もう第4ステージ(これで最後)」と私の耳元でささやいた。アルアリ医師の「ヒロシマ・ナガサキに行ってみたい」という言葉がずっしり重かった。彼が倒れないうちに必ず日本に呼んであげようと思った。

劣化ウランのダメージで死に直面しているおびただしい数のイラク人を、特に子供は痛々しくて気の毒だが、その人たちをすべて治癒することは到底出来ないが、せめて現場で格闘する医師にひとすじの可能性の光をなげかけてやる事ができたら、今はそれが重要なのだと思った。

イラクからパキスタンへの道は、バスラに下ってから、船でドバイへと取った。ウンム・カスル港を午後5時に乗船して、2日後の夜8時半にラシード港に着岸した。途中バハレーンの港に立ち寄ったが、48時間以上、水平線が丸く見える船旅をした。

パレスチナ、アフガニスタンでも劣化ウラン弾が？

9月にガザを訪ねた時、エジプトの国境に近い街道町ハーン・ユーンスの、1948年に北のハイファ近郊から非難してきた人たちのキャンプに行った。そこは2000年秋のインテファアで真っ先に襲撃を受け、その後も連夜爆撃が続くので夕方になると住人は家を離れた。キャンプは丘の上の古い旅籠町の外側に作られ、イスラエルの大きな入植地はそこから見下ろす海岸の決勝地にあった。上にあることが許せなかったらしいと地元では言うが、イスラエルにはエジプトとの回廊を塞ごうという意図があったろうと考えられる。海岸の巡航船トマホークからミサイルを打ち込んで、30戸の建物を瓦礫の山にした。トマホークはイラク攻撃の時に使われていて、ミサイルの先には劣化ウランがついていた。キャンプといえども50年も人が住むと大家族になっていて、それなりに強固な住まいを建てていた。イスラエルは劣化ウラン弾は使わないというが、パレスチナ人たちはイスラエルが劣化ウラン弾を使ったという。劣化ウラン被害はご承知のようにすぐは出ないので、パレスチナ側はとにかく調査中だという。ガザ新市街で毎夜のように見たものは、鈍い音を立てて低空飛行で行くF16戦闘機だった。ハーン・ユーンスや少し先の国境の町ラファへの爆撃だったが、F16戦闘機には核搭載能力もあるのだ。

ターリバンやアルカーイダ撲滅のアフガニスタン爆撃で、米軍はまた新型爆弾をテストしたようだが、その先っぽに劣化ウランが使われていないと誰が保証出来よう。戦車やシェルターをイラクで砕いたのだから、山岳深く潜る彼らを追ったものはさらに性能を高めた爆弾だったはずだ。素材として劣化ウランほどのスグレモノを使わないはずがない。

今回南東からアフガニスタンに入った町スピンボルダックで、どんな患者が運ばれてきたのかを診療に当たった医師たちに聞くと、「眼や耳や鼻から血を流した人が運ばれたり、皮膚がべろっと剥がれる患者がいて、運び込まれるとすぐ亡くなった。あれは

サリンじゃないか？」という話だった。爆撃の後すぐ証拠が挙がらないというのもウラン弾の特徴だから、今は誰もが何も言えない。

ペシャワールでは、ソ連侵攻時からアフガン難民の救援と救急診療をする「ヘドマート」という団体の代表者に、劣化ウラン被害の患者について聞いた。彼はちょうど放射線医学専門の医師だったけれども、「今は確たる証拠は何も出ていない」と言った。それよりも米軍が捕虜に対してどんな残忍な扱いをしているかを、帰ったら日本人たちに伝えて欲しいと頼まれた。捕虜移送にコンテナを使うので、何百人の人たちの半数はすぐ窒息死、目的地についたときは殆どが虫の息だったという。10人しか入れない牢に60人も入れるし、雪の中を裸で歩かせたり、米兵は捕虜の口の中におしっこをしたりとか。

ターリバンはペシャワールやラホールのイスラーム神学校で勉強したアフガニスタン人学生達で、アルカーイダといわれる人たちは、アメリカの爆撃からアフガンを守ろうと居ても立ってもいられなくイスラーム教徒が馳せ参じたいわゆる義勇兵だ。家族を伴ったアルカーイダもいて、その妻や子が米軍の執拗な追及を受けて生きられないほど窮地に追い込まれているのだという。現地滞在のあるジャーナリストが大金の賄賂を払って捕虜の牢獄を見せてもら



マンスールホテルよりチグリス川とバグダード市街を望む

うと、鼻が欠けていたり耳が削ぎ取られたり、指先が切られたりと、「何んでー？」という光景だったという。ちなみにウサーマ・ビン・ラーディンはニューヨークビル爆破を絶対指揮していないということを現地の信頼できる筋から聞いた。

イラクの劣化ウラン被害の患者と医師を日本に呼ぼう 募金のお願い

郵便振替 00170 - 9 - 80780

「劣化ウラン弾の嵐」制作委員会

問合せ先 : jamila@gray.plala.or.jp

Tel/Fax: 03 3332 1265

.....

核のゴミ切り捨て 法案と劣化ウランの危険な関係

劣化ウラン研究会代表 山崎久隆

劣化ウランはれっきとした「核のゴミ」である。

「核のゴミ」とは、法令により放射性廃棄物として処理、処分をしなければならない放射性廃棄物ないし放射性廃棄物に汚染された物質と定義できよう。劣化ウランはこのうち放射性廃棄物そのものということになる。

これまで「核のゴミ」には敷居が無かった。言い換えるならば、放射性廃棄物であれば全て原則的に核のゴミになるということになる。もちろん、測定限界以下というのであれば別だが。

また、個別に計測することが難しいような場合は、

一律「核のゴミ」として扱うという考え方もあった。例えば原発の放射線管理区域内で発生したゴミは原則的に核のゴミすなわち放射性廃棄物として処理されていた。

原発廃炉の時代を控え、膨大な核のゴミ発生を回避しようと考え出されたのが「クリアランスレベルの導入による放射性廃棄物すそきり」である。つまり一定基準以下の廃棄物は放射性廃棄物として処理せず一般産業廃棄物として処理したり、有用物（金属材料やコンクリート廃材）は再利用するというものである。この場合、全く放射性物質に汚染されていないものだけが一般産業廃棄物に回されるのであ

ればまだしも、危惧されるのは放射性廃棄物が一般産業廃棄物に紛れて処分場を通じて汚染が広がったり、ひどい場合は有用物に紛れ、放射性廃棄物が再加工された金属材料に紛れて身近に現れることである。

そのような未来を予見させるような事件がたびたび起きているが、最も最近の事例を紹介しよう。

日本発 ロシアで見つかった核のゴミ

2002年1月30日に、時事通信と毎日新聞が、放射性廃棄物の混入した金属スクラップがロシアで見つかった事件を報じた。ロシアのインターファクス通信は、ロシア極東の税関当局が2001年12月3日に日本からウラジオストク近郊のポストチヌイ港に到着した貨物から自然界のレベルを130倍以上にも上る放射線を検出し、押収したと報じた。

貨物は鹿島港から積み出されたロシアの商社あての346トンの金属スクラップで、申告書には「航空機のエンジンおよび部品」と記載されていたが、検査の結果、非鉄金属の放射性廃棄物と判明したという。税関当局は輸送した「ペトラポストーチヌイ」社に対し、放射性物質の排除を求め、同社は日本側関係者と話し合い、放射性物質をポリエチレンに包んで木箱に入れた上、さらにコンテナに入れ、日本に送り返すことで合意したという。

その後の調査で、航空機のエンジンという表記には誤りは無く、自衛隊で使っていた米国設計の航空機「T-33練習機」のエンジンであることが分かった。エンジン部品に強度を増すために放射性物質のトリウムを添加していたのだという。航空自衛隊で廃棄されたエンジン6基が、リサイクル金属として業者に払い下げられ、それがロシアに輸出されたものであるということだった。

しかしどうしてそんな危険なものが易々と日本の税関を通り抜けたのかと疑問に思っていると、意外なことが記事に書いてあった。「空自によると、T33のエンジンには、放射性物質のトリウムが含まれているが、放射線濃度などは国内基準を下回っており、規制対象外。」「空自では「税関の問題なので詳しくは分からないが、日本とロシアでは放射性物質に関する基準値が異なっているのでは」と話している。」

ロシアのほうが日本よりも放射線管理が厳しいというのだ。しかし検出された放射線量は環境値の130倍以上というのだから、にわかには信じられな

を付けたまま就航しているため、外国の航空機が事故を起こすと劣化ウラン汚染事故になる恐れはまだある。

軍用機と放射性物質

軍用機の場合、自衛隊機には劣化ウランは使われていないといわれているが、今回のように劣化ウラン以外の放射性物質がどこにどれだけ使われているのか一般に利用可能な情報はない。在日米軍機ともなると、機種も多様で製造年代も古いものから最新鋭のものまで多岐にわたるため、ますます詳細は分からない。

自衛隊は1999年11月22日に埼玉県狭山市で墜落事故を起こしたT-33練習機について、「劣化ウランは使っていなかった」としている。しかし別の放射性物質を使っていたことは明らかにしていない。エンジンの被災状況がどの程度だったかは今でははっきりしないが、放射性物質を巻き込んだ事故であったことは間違いのないのである。

装備品に劣化ウランを使っていた明白な証拠としては、これまで米海軍攻撃機A-7コルセアの操縦桿のカウンターウエイトという例がある。

2000年6月に岡山県玉野市の鉄工所で、表面に「Depleted Uranium」(劣化ウラン)の刻印のある金属物が見つかるという事件があった。米国から輸入したスクラップ金属の中に混じていた。NHK広島支局が調査したところ、これは米国製攻撃機A-7コルセアの操縦桿に取り付けられていたものであることが分かった。それに対し当時の科学技術庁は、何らまともな調査もしようとせず、鉄工所には保管を指示しただけだった。

その劣化ウランは一年半もたった今年1月23日に、文部科学省原子力規制室の係員がやってきて撤去したという。一年半も放置した理由について原子力規制室は「引受先を探すなど手続き上、時間がかかった」などと説明したという。

このように放射性物質が見つかったと、被曝を防ぐための管理や遮へいなどは見つけた側に負わせられる。国の規制当局は、そのことがどれだけの負担になるかを考える姿勢に欠けている。これでは不法投棄を誘発するだけである。

核のゴミが氾濫する

クリアランスレベルの検討により、切り捨てが合法化されれば、一定基準以下の放射性物質は放射性物質としての処分さえ必要なくなってしまう。

これは、高レベル放射性物質ではない劣化ウランを含む廃棄物が、これまで以上に私達の周りに存在する恐れが高まったということでもある。

玉野市の鉄工所では、溶解される前に発見できた

が、劣化ウランを溶かし込んでしまったら、放射線からそれを見つけるのは非常に困難になる。

基準以下の放射線管理が無くなるなかで、劣化ウランが使われ続ける現実、これまで以上に劣化ウランの環境への放出を招く抜け穴になる。

ロシア放射性物質事件は、そのことを強く警告している。



軍事基地は戦争のためのもの そして

米軍基地のある所では劣化ウラン弾が使われている

劣化ウラン研究会 伊藤政子

「梅香里（メヒャンニ）国際射爆場」－韓国で－

今、韓国の米軍射爆場とそれに反対する韓国の人々を描いた「梅香里」というドキュメンタリー映画が全国で上映されています。これは、大分／湯布院と沖縄の人々が、同じ米軍基地を持つ韓国の人々と結んで完成した、西山正啓監督の撮影による素晴らしい映画です。

冒頭から、韓国駐留米兵による韓国女性への暴行・殺人事件に対する韓国の人々の激しい怒りと抗議が映し出され、沖縄で頻発する事件が重なって見えます。この映画を作ろうと考えた基地の街である湯布院や沖縄の人々と、梅香里の人々の同じメッセージ「軍事暴力に国境はない」という思いが強烈に伝わってきます。

この映画の素晴らしさは、そのメッセージを居丈高に主張するのではなく、そこに暮らす人々を淡々と暖かく描いていることにつきると思います。漁民たちが、実射訓練が休みになる日に、本来とても良い漁場だった梅香里で牡蠣

をとってきますが、その収穫の海産物が本当においしいそうなのです。貝や魚を焼いているシーンなど、映像の煙なのに匂いまでただよってくるような気さえます。見た人たちが一様に「私も食べたい！」と言う程です。くり返される米軍の実射訓練によって島の形が変わる程、漁場が荒らされていること、米軍の演習訓練の休みの時にしか漁場にでられないことなどが、心から悔しく思えます。

でも、この梅香里米軍射爆場でも、劣化ウラン弾の薬莢が発見されています。もと米軍兵士が、薬莢の刻印から「劣化ウラン弾のものである」と証言しています。

あのおいしいそうな貝類が、そして、ただそこで暮らし続けていただけの人々が、劣化ウラン弾によって汚染されているかも知れないと考え、哀しさや悔しさも混じって、ぞっとします。

韓国には、駐韓米軍所有の劣化ウラン弾が約5万発保管されているといわれています。

2001年の2月には韓国の国会議員がこれらのことを発表しましたが、米軍当局は薬莢についても「劣化ウラン弾のものではない」と否定し、保有についても明確な答弁を避けています。

日本の沖縄／鳥島の劣化ウラン弾「誤射」事件以後、日本国内の劣化ウラン弾はすべて韓国に移送されたかのように語られています。

確かに、あの後から韓国での劣化ウラン弾は確実に配備増があったようだし、劣化ウラン弾を使用した訓練もくり返されているようです。韓国の基地反対運動の人々からは「日本が拒否した物が韓国に押し付けられた」とくり返し語られています。

けれど現実には「移管」を表明したのは海軍の分だけで、海軍は日本寄航の物だけでなく、すべての旗艦からの劣化ウラン弾撤去をすでに公表しています。沖縄駐留空軍は嘉手納／沖縄の弾薬庫にまだ劣化ウラン弾を保管し続けていることを2000年5月に認めていま

す。日本にも劣化ウラン弾は残されているままです。

つまり、米軍は日韓両国の基地

だけをとっても、総量としての劣化ウラン弾の配備増に成功たと言えるのではないのでしょうか。

米軍撤退のひとつのきっかけ—プエルトリコで—

2001年6月米国自治領プエルトリコでは、1941年からビエクス島で続けられていた米軍の爆弾投下などの軍事演習を2003年5月までに中止させることに成功しました。けれど悔しいことに、昨年9月11日のいわゆる同時多発テロ以降アメリカ政府は、軍事予算の大幅な増額にも成功し、どこの国に対しても思いのままに軍事力を行使できるようにと国内の世論をまとめきってしまったかのようです。戦争を起こしたければいかなる軍事施設も縮小したくないのは当然です。米国議会の軍隊協議委員会は、今年1月に予定されていたビエクスの住民投票をキャンセルし海軍がビエクスから撤退するとしていた日付(2003年5月)を削除すると発表しました。何ということでしょう。

それでも、私たちはそれまでのプエルトリコの人々から学ぶことが沢山あると思います。

プエルトリコでは、以前から基地反対の運動はありましたが1999年4月に米軍機の誤爆により住民が死亡したことで自治領政府や議会も一体となった反対運動が燃え上がって、米軍はビエクスからの撤退を余儀なくされたのです。

この反対運動の力強い支援者のひとりに、アメリカ人のダグ・ロッキー博士がいます。彼は、アメリカ軍内部で湾岸戦争で劣化ウラン弾に汚染された戦車から劣化ウラン弾の影響調査や汚染除去について実践を続けていた科学者です。

ビエクスでは、1999年2月に米軍による劣化ウラン弾(少なくとも

も258発)の使用が確認されました。米軍のコソボへの攻撃の出撃訓練時に、海軍が使いました。海軍の兵士が「ビエクスでは、何年間もの間劣化ウラン弾が訓練に使用されてきたけれど住民に証拠をつかまれたのはこれが初めてだ」と報告しています。

ダグ・ロッキーは、1999年3月に公式報告からこの事件について聞くとすぐに「この行動は国防省指令と連邦法の故意の違反であると合衆国原子力規制委員会によって実証される」として、ビエクス島におけるすべての爆撃演習を停止し、さらにすべての汚染をきれいにして個人に医療を提供することを海軍に要請します。また、海軍での劣化ウラン弾の使用は禁止されるがすでにビエクスに発射された弾丸の除去をするようにとも提案します。また自分の所属する陸軍のACERT(劣化ウランまたは放射性物質に汚染された装置処理班)をビエクスに派遣するよう陸軍に

も働きかけるのですが、ことごとく拒否されます。付記すれば、彼は沖縄での事件後も同様の働きかけを軍内部でしていますが、やはり同様に拒否をされています。

ダグ・ロッキー自身の軍や米政府への働きかけは実を結んでいませんが、加害の側の米国の軍人としてビエクスにおける劣化ウラン弾使用の問題を声高に訴え続けたことが、ビエクスでの基地反対運動に力を与えたことをご紹介します。

ダグ・ロッキーは、「米国防省は、どんな反対運動があっても劣化ウラン兵器を使い続けるつもりであって、また劣化ウラン兵器使用によるいかなる健康や環境への結果も否定し続け、彼らの責任ではないと言いつのの方針だ」と批判しています。

劣化ウラン弾は、核兵器などの大量殺りく兵器とは違う「通常弾」として米軍では扱われています。

劣化ウラン弾の実射訓練の標的とされまま、ビエクス島に放置されている汚染した戦車の絵 Nilda medina Diaz(プエルトリコ)

ニュースクリップ

DU弾 腎臓に障害 英国王立学士院の 研究班が報告

3月13日毎日新聞ニュース速報より
米国などが湾岸戦争などで使用した劣化ウラン弾による健康被害を調査していた英国王立学士院の研究班は12日、使用された劣化ウラン弾から出る物質は腎臓に障害を起こすという報告書をまとめた。

報告書によると、使用された劣

化ウラン弾から飛び散った物質が空気中から吸入されたり、水などとともに体内に入ると腎臓にたまる。かなりの量が蓄積されると急性の腎臓病を起こすことがわかった。研究班は劣化ウラン弾によって汚染された土壌や水による健康被害は大人よりも子供に危険が大きいと警告した。

王立学士院は昨年5月にも「劣化ウラン弾から出る粉じんは肺がんを起こす恐れがある」という報

告書を出している。国連は旧ユーゴスラビア・ボスニア紛争などで米軍などが使用した劣化ウラン弾による土壌調査を進めているが、王立学士院は兵士や住民の定期的な健康診断の必要性を指摘している。

*劣化ウラン研究会でも現在詳細を調査中。

資料紹介

『人類と環境を 破壊する 劣化ウラン』

劣化ウラン研究会編
たんぼ舎発行
(2001年11月)
定価400円

当会が発行したニュースレター第0号から第3号を合本したものの。【内容】人類がもてあます核のゴミ - 劣化ウラン / 日本の原子力発電と劣化ウラン / 劣化ウラン軍事利用の実態 / 反劣化ウラン国際会議 / 湾岸戦争に未だ謎残る / ボスニア症候群で再度注目される湾岸戦争の影響 / 劣化ウラン弾使用地点記載ユーゴスラビア・コソボ自治州周辺地図 / 二十世紀最後の戦争「セルビア大空襲」 / ウラン吸入の健康影響 / 劣化ウラン研究会
声明

ご案内

森住 卓 写真展

Children of The Gulf War
イラク・湾岸戦争の子どもたち

4月8日～4月13日 10:00～19:00

銀座ニコンサロン

中央区銀座5-11-4 銀座クレストビル2階

TEL: 03-3248-3783

'98年から取材してきたイラクでの湾岸戦争で使われた劣化ウラン弾と経済制裁の影響をまとめました。

是非ご覧ください。(森住卓)

劣化ウラン兵器を

造らせない 持たせない 使わせない

劣化ウラン研究会

〒176 0002 東京都練馬区桜台1 3 5 野村方

TEL: 070 5216 0220 (大本)

E mail: tr2k-tnk@asahi-net.or.jp (田中)

入会方法: 通信欄に住所・氏名・電話番号・Eメールアドレスを明記して、年会費(個人2000円・団体4000円)をお振込みください。

郵便振替口座 00100-2-155130 劣化ウラン研究会